

三日市A遺跡10

2024

石川県野々市市教育委員会

三日市A遺跡10

2024

石川県野々市市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、三日市A遺跡の第42次発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、石川県野々市市二日市四丁目地内である。
- 3 調査原因は、商業施設の解体工事である。
- 4 調査は、株式会社セレマ（以下事業主）から依頼を受けて野々市市教育委員会生涯学習課が実施した。
- 5 調査にかかる費用は、事業主が負担した。
- 6 現地調査は、生涯学習課 西村慈子が担当し、令和4年度を行った。調査面積は425m²である。
- 7 報告書執筆・編集は、生涯学習課 腹地孝大が担当した。
- 8 現地作業は、株式会社太陽測地社に支援業務を委託した。
- 9 本書についての凡例は以下のとおりである。
 - (1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅷ系に準拠している。なお、過年度調査との整合性を保つため、現地調査は日本測地系に変換してグリッド杭を打設している。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
 - (4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。
 - (5) 土層図・遺物観察表の色彩注記は、「新版標準土色帖」に掲載した。
 - (6) 遺構名前の略号は以下のとおりである。
　掘立柱建物：SB 溝：SD 小穴（ピット）：P
- 10 平成23（2011）年11月に野々市町が市制に移行して野々市市となっている。本書では特に使い分ける必要がある場合を除き過去の経緯についても野々市市に表記を統一する。
- 11 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

第1章 経緯と経過	1
第2章 位置と環境	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の方法と基本土層	3
第4章 遺構と遺物	3
第1節 遺構	3
第2節 遺物	6
第5章 総括（三日市A遺跡の中世集落について）	10
第1節 令和4年度調査範囲の位置付け	10
第2節 三日市A遺跡で発見された中世遺構	10
第3節 周辺の集落との比較	11

第1章 経緯と経過

本書で報告する三日市A遺跡は遺跡面積が約104,000m²に及び、野々市市北西部土地区画整理事業等に伴い平成12（2000）年から23（2011）年度にかけて延べ41次にわたる発掘調査が実施されているほか、石川県教育委員会による河川改修等による調査が実施されている。野々市市が調査しただけでも約90,000m²と遺跡全体の約86%に及び、多くの調査成果が得られている。

本書で報告する第42次発掘調査は、既存の商業施設が解体されることを受けて令和4年度に実施したものである。この施設の東側及び南西隅は土地区画整理事業に伴い発掘調査（市14・29・39次調査）が実施されていたが、一部三角形の未調査範囲が残されていた。今回解体された施設は平成23年度に建設された。建設にあたっては一辺1~2mのコンクリート杭を64箇所打設される設計であり、その一部が未調査範囲に及んでいた。平成23年7月13日付教文第149号で文化財保護法93条に基づく土木工事等のための発掘届を進達した結果、遺跡を破壊するものの影響を受ける範囲が狭小であることから工事立ち合いの上で着手が認められた。

その後、令和3（2021）年度中にこの施設を解体する計画が浮上する中で、基礎のコンクリート杭を抜き取ることにより建設当時より遺跡が広範に破壊されることが明らかになったため石川県教育委員会文化財課と協議を行った結果、施設の解体に伴う発掘調査を実施することとなった。

令和4年6月8日付で事業主より文化財保護法93条に基づく土木工事等のための発掘届が提出され、同日付で石川県教育委員会から発掘調査を実施する旨が通知された。令和4年8月4日付で野々市市と事業主との間で発掘調査の実施に関する受託契約を締結した。

発掘調査は野々市市教育委員会生涯学習課が実施し、西村が担当した。既存施設の解体が令和4年9月頃から開始され、10月中旬に基礎部分まで到達した。10月31日より現地調査を開始し、調査員立会の元で解体業者の重機で骨材を撤去したのち地山面まで掘削した。その後人力による遺構検出作業、遺構掘削と進み、11月29日にはRCヘリコプターによる空中写真測量を行った。12月5日に現地調査を終了した。

整理作業は令和5（2023）年度に腰地が担当し、令和6（2024）年3月に報告書を刊行した。

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置

野々市市は石川県のはば中央に位置し、北東部を金沢市と南西部を白山市にそれぞれ接している（第1図）。東西4.5km、南北6.7km、面積13.56km²と狭いものの、人口は令和2年10月時点で57,238人であり、年々増加している。

野々市市は白山から流れる県下最大の河川である手取川によって形成された扇状地（手取川扇状地）の扇央部から扇端部に位置している。標高は最高49.6m、最も低い地点で8.4mと比較的平坦な地形である。手取川は何度も流れを変えながら大量の砾を含む土砂を運搬しており、手取川から分岐する中小河川によって南北に延びる微高地が形成されている。三日市A遺跡は標高約15mの微高地に位置している。



第1図 野々市市位置図

第2節 歴史的環境(第2図)

紙幅の関係上、ここでは三日市A遺跡及び周辺に位置する遺跡の概要を述べるにとどめる。

三日市A遺跡は縄文・弥生・古代・中世・近世にまたがる複合遺跡であり、特に弥生時代後期後半・古代(8~10世紀頃)・中世後半(13~15世紀頃)に集落としてのピークを持つ。弥生時代は遺跡北東側を中心に遺構が分布しており、集落域のはか方形周溝墓が発見されるなど墓域も見つかっている。古代では能美郡比奈駅から加賀郡田上駅の間に比定される北陸道や大型掘立柱建物が見つかっている。中世では13~15世紀頃の建物跡や宅地を区画する溝が見つかっており、一般的な農村の様相を呈するほか、東西・南北方向に延びる道路遺構なども見つかっている。

このほか二日市イシバチ遺跡、徳用クヤダ遺跡、郷クボタ遺跡、三日市ヒガシタンボ遺跡の4遺跡が土地区画整理事業に伴い大規模に調査されている。いずれも弥生時代後期後半から古墳時代初頭、古代(9世紀~10世紀)、中世(12~15世紀)を中心とする集落、耕作地及び墓域であり、時期ごとに移動しながら集落を形成していることが読み取れる。

二日市イシバチ遺跡では弥生時代後期の集落、古墳時代前期の古墳群及び集落、中世後半(13~14世紀)の集落が見つかっている。中世後半の集落は三日市A遺跡と同様に溝や柵などで区画した宅地がもうけられ計画的な村の構成となっている。

徳用クヤダ遺跡では弥生時代後期後半の集落や10世紀頃の集落が見つかっているが、主な時期は中世で、中世前半(12世紀)と後半(14世紀頃~15世紀頃)に細別される。特に中世後半では大溝で囲繞された有力者層の屋敷地および一般民衆層の宅地が見つかっている。

郷クボタ遺跡では、弥生時代後期・古墳時代初頭の集落、古代(9世紀半ば~後半)の公的機関とも推察される大型掘立柱建物群、中世(14世紀頃)の溝で囲繞された在地領主層の宅地や、道路遺構及び市庭機能を有すると目される掘立柱建物群が見つかっている。

三日市ヒガシタンボ遺跡は弥生時代後期の集落、古墳時代前期の古墳群及び集落、中世後半の集落が見つかっている。また古代の道路遺構が見つかっているとされているが、中世まで時期が降り三日市A遺跡や郷クボタ遺跡で見つかっているものと一連となる可能性が指摘されている(北川ほか2020)。



2

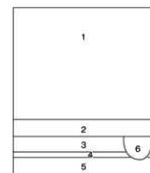
第3章 調査の方法と基本土層(第3~4図)

調査範囲は既存施設が位置していた未調査範囲のうち、過年度調査で近現代流路が継続すると予想される範囲を除く形で設定した(第4図)。

基準となるグリッドは過年度調査との整合性を保つため、世界測地系(測地成果2011)の座標を日本測地系に変換し10m単位で打設した。(X=59,800.0、Y=50,800.0)を原点(A,1)とし、南側にB、C···Y、Z、AA、AB···、西側に2、3···とした。本調査区ではAK9、AK10、AL10を打設している。

なお、調査終了後測量図面を校正する段階で、過年度調査で打設した杭に誤差があることが判明した。本来であれば本報告の段階で過年度調査成果の座標をすべて再校正すべきであるが、調査範囲が広範であり、かつすでに報告書として刊行されていることを鑑み、42次調査範囲を過年度調査の図面に合わせる形で整合させた。42次調査区の正確な位置は東に0.476m、北へ0.153m平行移動した位置である。

基本となる層序については、1.土地区画整理事業や既存施設の建設等に伴い造成された現代造成土、2.旧耕作土、3.古代の遺物包含層、4.3層と5層が混じる希格層、5.2.5Y5/3 黄褐色シルト(Fe沈着、地山、部分的に礁多く含む)、6.灌漑覆土



3 図 基本土層模式図 (S=1/40)

第4章 遺構と遺物(第5~9図)

第1節 遺構

検出した遺構は、掘立柱建物2棟、溝2条、小穴82基を確認している。ここでは掘立柱建物と溝について所見を記す。なお遺構番号は種別を問わず通し番号を附番したのち、建物のみSBI・2として別途定めた。

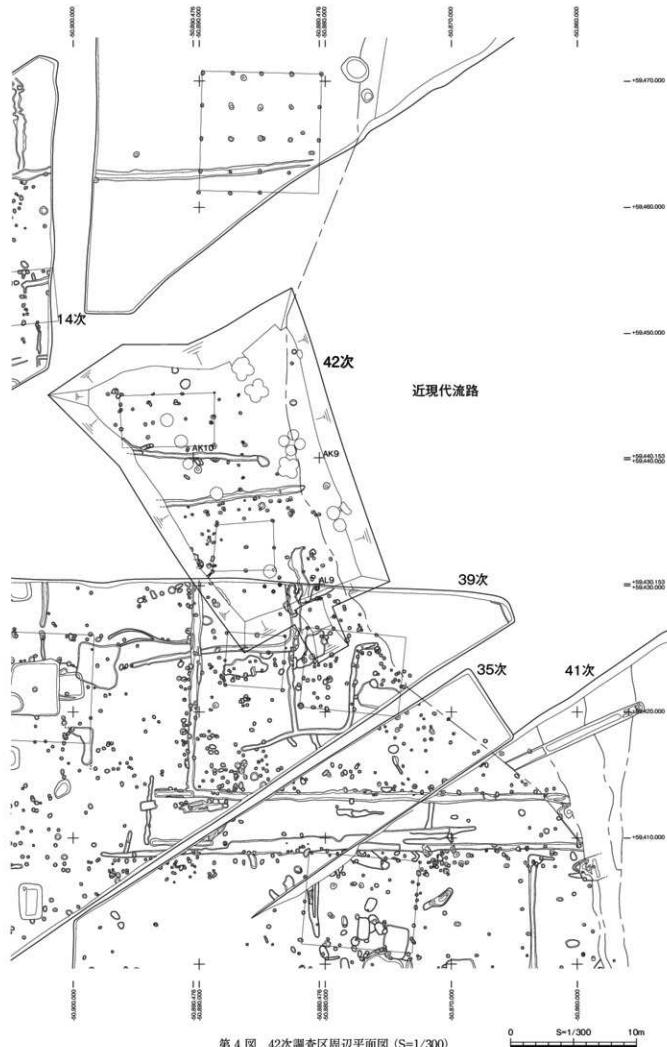
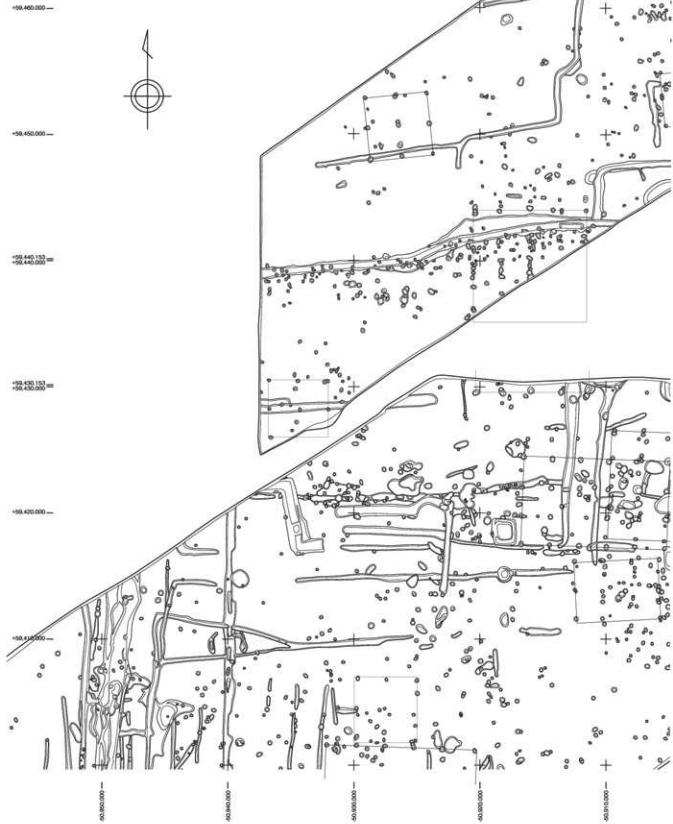
掘立柱建物

SBI(第8図)

P26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36で構成される。西側は調査区外に延びる可能性があるが、東西3間、南北2間の総柱建物である。東西7.6m、南北4.2mを測り、柱穴は径15~30cm前後の平面円形で、深さは7~20cmとばらつきが大きいが、覆土の状況から基本層序3層上面から掘り込まれていると考えられるため本来は少なくとも更に15cm程度は深い穴であったと考えられる。建物方位はほぼ正方位であり、南側の溝SD2とは

+59.470.000
[日本測地系]
「世界測地系(測地成果2011)」より「日本測地系」へ座標変換
過年度調査図面との整合をとるために、補正数値あり
Y軸(東へ)0.476m、X軸(北へ)0.153m、斜距離0.500m

: 挖立柱建物



第4図 42次調査区周辺平面図 (S=1/300)

は並行する。遺物は出土していないが、遺構の様相及び調査区出土遺物から中世の建物と考えられる。

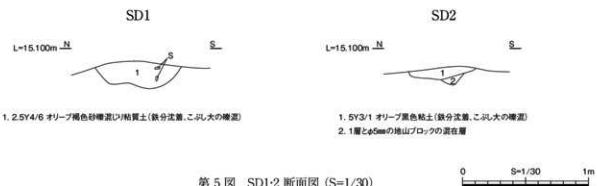
SB2(第9図)

P92・93・94・95・96・97・98・99で構成される。東西2間、南北2間の総柱建物である。南東隅の柱穴はかく乱により失われてしまっている。1辺4.5mを測り、柱穴は径15~30cm前後の平面円形で、深さは10~33cmとばらつきが大きいが、覆土の状況から基本層序3層上面から掘り込まれていると考えられるため本来は少なくとも更に15cm程度は深い穴であったと考えられる。建物方位はほぼ正方位であり、北側の溝SD1とはほぼ並行する。遺物は出土していないが、遺構の様相及び調査区出土遺物から中世の建物と考えられる。

溝

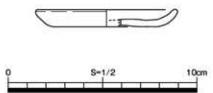
SD1・2(第5・7図)

東西方向にのびる溝である。いずれも幅約50~70cm、深さはSD1で約20cm、SD2で約15cm程度の浅い溝である。いずれも調査区東側から発し西側調査区外に向けて伸びている。SD2の底部では、掘削時の跡が当たった痕跡が確認された。周辺の調査区で同様の溝が多数検出されており、いずれも方形に区画する宅地割の溝と考えられる。SD1からは土師器皿(第6図)が出土している。

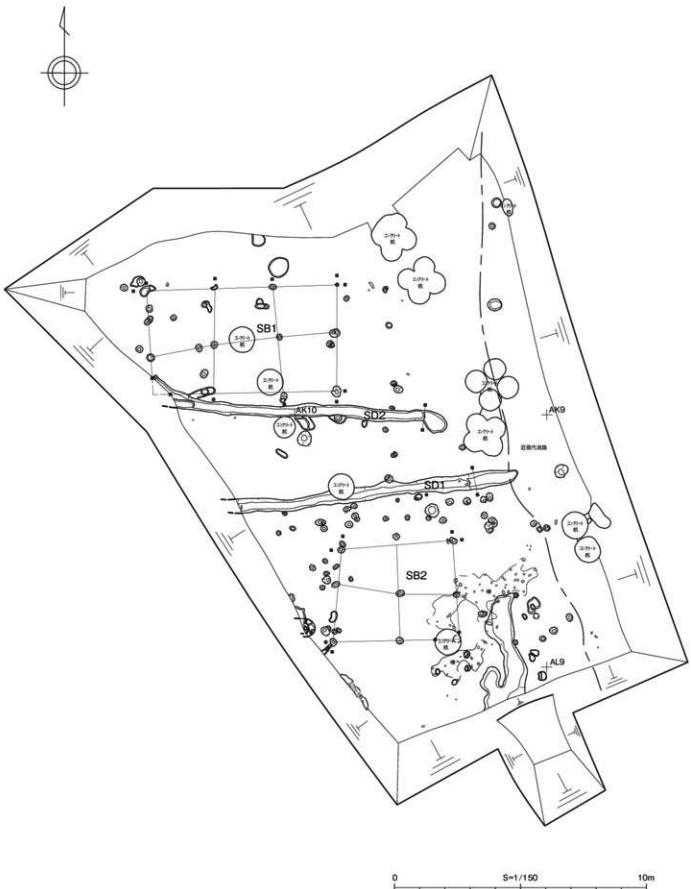


第2節 遺物

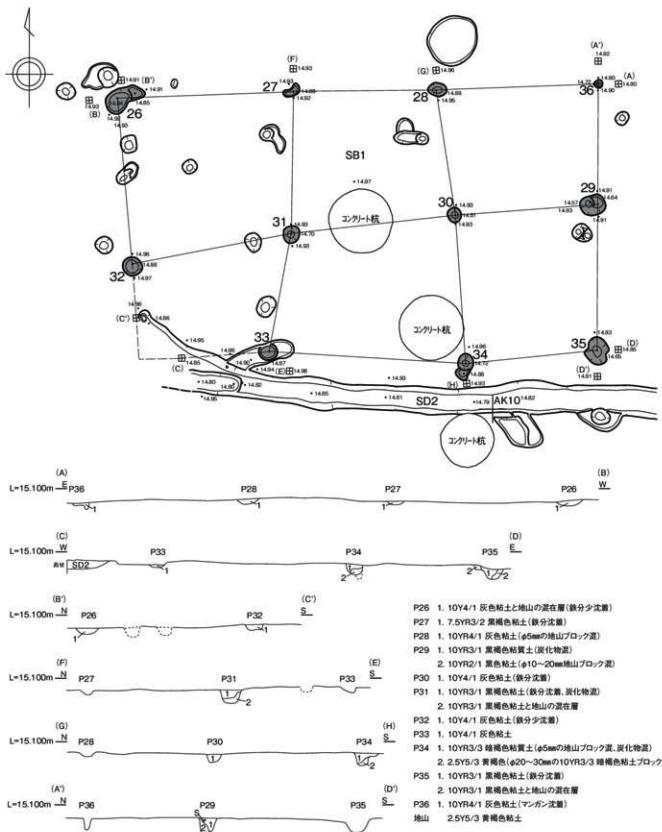
遺物は中世の土師器皿等が出土しており、出土量はコンテナ1箱に収まる。実測し得るものは1点のみであった。中世の土師器皿であり、直径74mm、器高9mm程の小皿であるが歪みが大きい。摩耗しており調整は不明瞭であるが、内外面ナデ調整で胎土には赤色粒を微量含む。藤田分類のAタイプに属し、14世紀頃に収まるものと考えられる。



第6図 遺物実測図 (S=1/2)

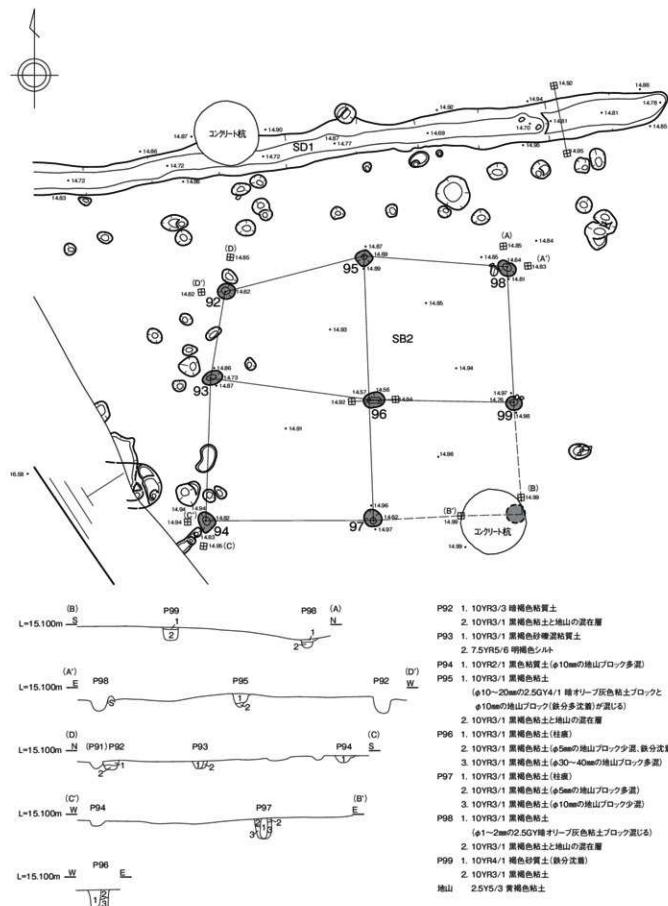


第7図 42次調査区平面図 (S=1/150)



第8図 SB1 平面・断面図 (S=1/60)

0 S=1/60 2m



第9図 SB2 平面・断面図 (S=1/60)

0 S=1/60 2m

第5章 総括（三日市A遺跡の中世集落について）

第1節 令和4年度調査範囲の位置付け（第4・10図）

今回報告した調査範囲は掘立柱建物2棟が発見され、第14・39次調査で見つかった遺構と一単位の集落となると評価できる。

前章の通り本書で報告した調査範囲は中世の集落の一端であると評価できる。ただし425mと狭小であり、かつ開発によるかく乱を受けるなどの制約があるため、この範囲のみで評価を下すことは非常に困難である。ここでは三日市A遺跡の過年度調査で発見した中世後半の集落について整理する形で本調査の位置づけを検証してみたい。

第2節 三日市A遺跡で発見された中世遺構

過去の三日市A遺跡発掘調査で発見された中世の遺構は掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸、土坑、区画溝などがある。掘立柱建物は本報告の2棟を含めて104棟が確認されている。主な時期は13世紀後半から15世紀末であり、更に13世紀から14世紀頃と、14世紀後半から15世紀以降では集落構成が変化する様相があがかる。

13世紀から14世紀頃の集落は遺跡中央北側を中心に各所に点在している。遺跡中央では三日市A遺跡を南北に2分する形で横断する道路遺構が検出されている（県H27調査・北川ほか2020）。路盤面は削平されており確認できなかったが、両側の道路側溝が確認された。道路側溝に挟まれた路面幅は約5mで、近接する郷クボタ遺跡や番匠遺跡まで続く幹線道である可能性が指摘されている。この道路は13世紀後半には機能しており、15世紀以降に埋没したものと考えられている。この道路遺構の他にも平行または直行する側道と位置付けられる道路遺構が見つかっている（市29次調査ほか）。

集落構成は、正南北または東西方向に直線的に伸びる区画溝や上記の道路遺構によって方形に区画された宅地割を1単位としている。区画溝の規模はばらつきが大きいが、概ね幅50～100cmほどの簡易な素掘り溝である。集落は掘立柱建物と竪穴状遺構、井戸などが点在する居住域と耕作地で構成されている。遺跡中央などでは、掘立柱建物1～2棟と物置や作業小屋と想定される竪穴状遺構がセットとなり、他に共同利用の井戸が置かれた一般的な農村の構成と想定されている（市29次調査ほか）。この他、上記の側道に沿う形で掘立柱建物が建ち並ぶ市庭（市場）的構成が確認されている（市29・31・32・35次調査ほか）。

またこの時期の墓域が遺跡北東部（市17・24次調査）で確認されている。五輪塔を伴う周溝墓や土坑墓などが見つかっている。

これらの構成が、14世紀後半から15世紀頃には、遺跡北東隅（市12・20次調査）や南西部（市15次調査）などで見つかったような、溝で区画した方形の宅地内に掘立柱建物や竪穴状遺構が同位置に複数回建て替えられ、より集住する構成に変化している。

時期の降るものとしては遺跡南部（市30次調査）では大窓1期、15世紀末頃に比定される土坑墓群が見つかっている。ここでは近世前半の鍋被り葬による土坑墓なども見つかっており、西側に近接する近世以降現代まで存続する三日市集落に繋がるものと考えられる。また調査区北東隅でも近世に繋がる溝などが確認されており、遺跡北側に位置する現在の二日市集落に続くものと考えられる。

第3節 周辺の集落との比較

末尾になるが、周辺の遺跡との関連について若干触れる。第2章で触れた通り郷クボタ遺跡や徳用クヤダ遺跡などでは、三日市A遺跡とは同時期の方形に区画された屋敷地が見つかっている。特に徳用クヤダ遺跡では幅2mほどの大溝に埋められた、南北60m、東西30mほどの屋敷地が見つかっており、日常雑器のほか遊戯具の基石や青磁花瓶、青磁香炉などが見つかっている。また郷クボタ遺跡でも、14世紀代の一町程の規模をしめる在地領主層の居宅が廃絶された後、道路沿いに建物が立ち並ぶ町場としての機能を有していた集落が存在したと位置付けられている。

これらと比べると三日市A遺跡で見つかっている宅地は、区画溝が簡素な作りであり、階層化の形跡を見出しつらい。同規模の一般民衆層の宅地および耕作地が点在する農村であり、加えて道路を中心に掘立柱建物が建ち並ぶ市場集落としての機能を有していたものと位置付けられよう。「三日市」という三斎市に関連する地名に立地していることの関連性が興味深いところである。

本来であれば過年度調査出土遺物についてもより詳細に分析すれば、中世集落のより細かい様相が明らかになる所であるが、紙幅の関係及び筆者の力量不足により十分に触れられない。本稿について読者のご批判を受け、今後更に検討を進めたい。

〈参考文献〉（野々市市教育委員会が刊行した報告書は割愛する）

北川剛夫ほか／2020『富山市・野々市市二日市イシバチ遺跡2 三日市A遺跡2』

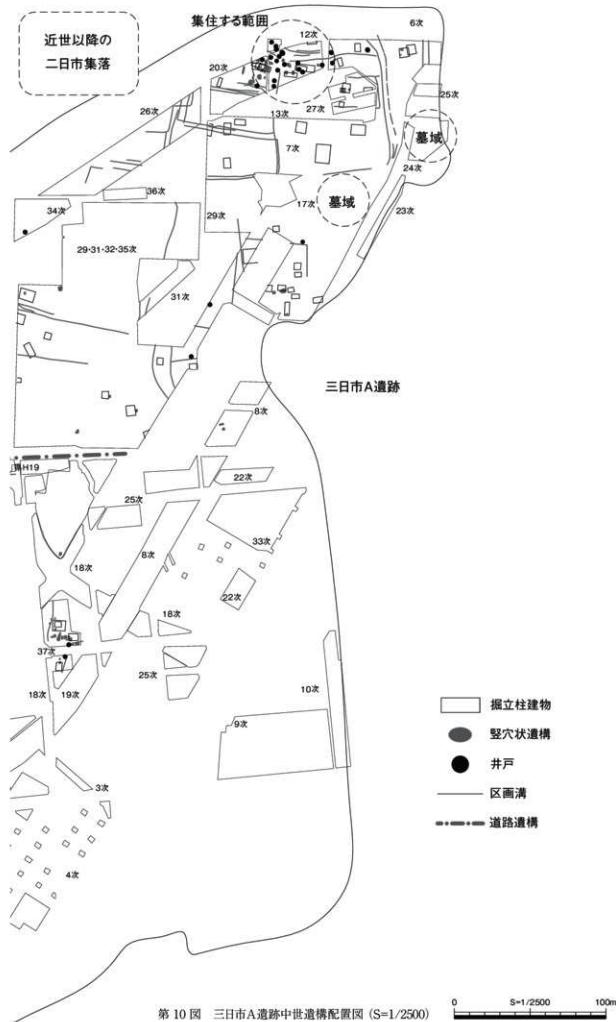
二級河川安原川広域河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書、石川県埋蔵文化財センター

野々市市史編纂専門委員会編／2004『野々市町史集大編』

藤田邦雄／1997『第2節 中世加賀国の土師器様相』「中・近世の北陸」北陸中世土器研究会、桂書房



12



第10図 三日市A遺跡中世遺構配置図 (S=1/2500)

0 S=1/2500 100m

第1表 出土遺物(土器)観察表

番号	出土位置	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		残存率	備考
						調整(外)	色調(外)		
1	SD1	土師器 皿	74	9	56	ナデ	SYR7/6橙色	1/2	全体にかがみあり
						ナフ	SYR7/6橙色		

報告書抄録

ふりがな	みっかいちあいせき					
書名	三日市A遺跡10					
副書名	商業施設解体に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
著者名	野々市市教育委員会					
編集組織	野々市市教育委員会					
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目1番地 Tel:076-227-6122					
発行機関	野々市市教育委員会					
発行年月日	2024年3月22日					
所蔵遺跡名	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
三日市A遺跡	石川県 野々市市 三日市A遺跡 二日市四丁目	172120 1202000	36° 32' 14" 136° 35' 43"	第42次 2022年10月31日～ 2022年12月5日	425	商業施設 解体工事
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			
集落	中世	掘立柱建物、溝	土師器			
要約	商業施設解体に伴う発掘調査である。中世後半の掘立柱建物2棟及び区画溝を検出した。周辺の過年度調査でも同様の中世集落を検出しており、その一部に位置付けられる。					

2024年3月22日 発行

三日市A遺跡10

著作権所有 石川県野々市市三納一丁目1番地
 発行者 野々市市教育委員会
 印刷者 石川県能美郡川北町土室か16番地
 高桑美術印刷株式会社



遺構検出(東から)



遺構完掘(東から)



完掘空中写真(南東から)



SB1 完掘(西から)



SB1-P29 断面(東から)



SB1-P31 断面(東から)



SB2 完掘(南東から)



SB2-P95 断面(北から)



SB2-P96 断面 (南から)



SB2-P97 断面 (南から)



SB2-P99 断面 (東から)



SD1・2 完掘 (南東から)



SD1 断面 (西から)



SD2 断面 (西から)



SD2 銀先痕跡検出状況 (東から)



出土遺物1 (S=1/2)